

自己評価報告書

平成23年5月10日現在

機関番号：32627

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2012

課題番号：20520423

研究課題名(和文) 書記史・文体史研究資料としての勸修寺法務寛信撰述書の調査研究

研究課題名(英文) A Study of Materials on the History of Manner of Writing and Style
Written by Kanjin (Belonging to Kajuji-Temple)

研究代表者

山本 真吾 (YAMAMOTO SHINGO)

白百合女子大学・文学部・教授

研究者番号：70210531

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：書記史、文体史、勸修寺法務寛信、国語資料研究、国語学

1. 研究計画の概要

本研究は、平安時代の院政期に活躍した勸修寺法務寛信(1084-1153)の、数多くの、そして多彩な撰述書が、日本語史研究資料、特に書記史、文体史に資する有益な文献であるとの認識から、その古写本の実地調査を行い、当該文献群の資料的性格の解明と書記史、文体史研究の新たな方向性を提示することを目的とする。この目的を達成するために、以下のような研究計画を立てた。

(1) 勸修寺法務寛信の関係した文献は、撰述書、訓点資料、和歌、日記等多岐にわたる。これらが、どこにどのような形で所蔵されているかを調査する。具体的には、以下の諸寺院を中心に現地調査を行う。

- ①東寺
- ②高山寺
- ③石山寺

(2) 上記の寺院等で実地に原本に従って、書誌的情報及び語学的情報(書記、文体)を記録し、データとして蓄積する。

(3) 文献ごとに、書記上の特性を軸に、これと文体、語彙・語法上の特徴との相関を観察する。

(4) 勸修寺法務寛信以外の、当時の書記・文体の全体的状況を踏まえることで、寛信の言語資料を相対化する。

2. 研究の進捗状況

これまで推進した研究内容の進捗状況を纏めれば、大凡以下のとおりである。

(1) 寺院経蔵における原本実地調査の実施

近畿地方の、京都市の東寺、高山寺及び大津市・石山寺の古寺院経蔵を軸として、勸修寺法務寛信の自筆本、撰述書、手沢本、伝領本など、彼にゆかりのある文献を広く探索

し、現地において原本調査を行った。

日本語史の、特に書記史・文体史の資料として活用するためには、原本を実見することが不可欠であり、書誌的、文献学的情報も含めて調査をとった。

(2) 研究成果の公開

具体的には、次項5の研究発表(雑誌論文)のそれぞれであるが、とりわけ、「翻刻・翻字の限界—日本語史研究の立場から—」(岩波書店『文学』11-5、2010)は、原本調査を行い、これを活字に置き換えて本文データを提供する上でどういった問題が生ずるかについての理論的考察を行ったものであり、「勸修寺法務寛信の言語生活について」(『言語変化の分析と理論』おうふう、2010)は、勸修寺法務寛信の多面的な書記生活の実態の全体像を俯瞰したものであり、当初予想した以上に、院政期における、勸修寺法務寛信の記録的活動の意義は甚大であることが確認された。具体的には、事相書、日記、表白の漢文的述作が中国古典文(正格漢文)に準拠するものから記録体(変体漢文)に及ぶさまざまな幅のあることがわかり、仮名書き資料、訓点資料(主として東大寺点を使用)、和歌、字書に至るまで、広範に彼の言語活動の足跡を辿ることができ、「読む」「聞く」「話す」「書く」の四要素に亘り、勸修寺法務寛信がどういった言葉の生活を営んでいたかの大凡の実態を解明することができた。

(3) 現段階の状況と今後の課題

本研究の3年目にあたる前年度は、研究計画に沿って予定通り進められているかどうかの点検も行いながら、推進した。

上記のような成果が得られるとともに、次のような課題の存することも明らかになり、これらが本年度以降の課題となる。

①漢文資料において未調査の文献が多数存在することが確認され、原本調査の継続が必要であること。

②寛信撰述書の書記、文体史的意義を明確にするために比較材料を探索して相対化を図ることが必要であること。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

当初の研究計画に沿って、変更なく遂行できている。今後も、所蔵寺院との協力を維持してゆけば、計画通りの遂行は可能であると判断される。

4. 今後の研究の推進方策

(1) ヨーロッパ日本研究協会(EAJS)第13回国際会議(エストニア・タリン大学: 8月24~27日)に参加して、「The Scope and Prospects of Kanten Research in Japan」の総合題目の下、4名の研究者が各専門領域の内容ごとに発表を行う。このうち、山本は「和化漢文の文体的特徴とその国語学的な貢献」と題して、寛信撰述書の多種多様な変体(和化)漢文資料を紹介し、文体的特徴の指標を提示し、院政期変体(和化)漢文体の全体像を展望する内容を予定している。すでに発表の申し込みは済んでおり、発表許可の審査を通過している。

(2) 近畿地方の京都市・高山寺、東寺、奈良市・奈良文化財研究所等に所蔵の院政期漢文体資料の調査を実地に行い、寛信撰述書の文体的特徴を記述するための比較材料を収集し、分析を行う。今年度は、特に寛信の日記、事相書、表白の特徴を記述するための補足調査を実施する予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

①山本真吾、翻刻・翻字の限界—日本語史研究の立場から—、文学(岩波書店)、11-5、p144-158、査読無、2010

②山本真吾、勸修寺法務寛信の言語生活について、言語変化の分析と理論(おうふう)、p235-247、査読無、2010

③山本真吾、東大寺図書館蔵七喩三平等十无上義について、古典語研究の焦点(武蔵野書院)、p453-478、査読無、2010

④山本真吾、変体漢文解読の方法と実際—変体漢文訓点資料の諸相—(韓文)、韓国文化、44、p269-287、査読有、2008

[学会発表](計2件)

①山本真吾、12世紀の日本語における仏教漢語の生態、2008年9月20日、第13回全国近代漢語学術討論会、中国社会科学院語言研究所・浙江財経学院(中華人民共和国)

②山本真吾、変体漢文解読の方法と実際—変体漢文訓点資料の諸相—、韓日国際ワークショップ「古代韓日の言語文化比較研究」、2008年2月21日、ソウル大学校奎章閣韓国学研究院(大韓民国)

[図書](計0件)

該当無し

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

該当無し

○取得状況(計0件)

該当無し

[その他]

該当無し